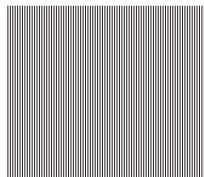


「地名」が繋ぐもの



河合香吏

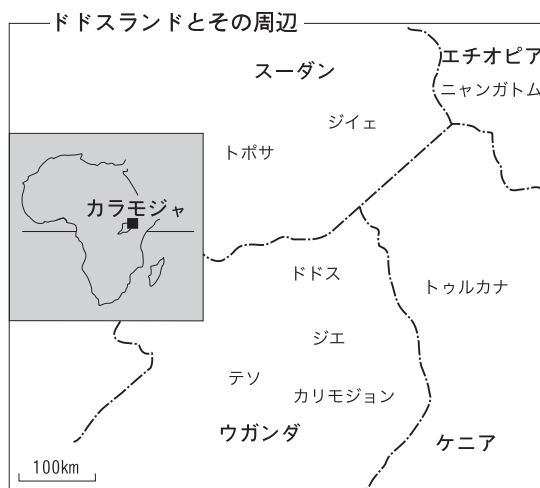
ドドスはウガンダ北東部カラモジャ地方に住む東ナイロート語群テソートゥルカナ (Teso-Turkana) 系のウシ牧畜民である (図参照)。一昨年に現地調査を開始したばかりであるが、ここでは、ドドスの土地認識のありかたを探る手がかりとして着目している「地名」という知識について、1999年12月～2000年2月にかけての短期調査からレポートしたい。

1 ドドスランドの「地図」

1999年12月。前年の予備調査で2週間ほどを過ごしたおなじ集落の敷地内にテントを張り、2カ月半の予定で調査を開始した私は、集落の青年を相手に乾季の水場についてききとりをしていた。当時ドドスランドの北東部には、国境をはさんで隣接するトゥルカナがケニアからウシを連れてきていた。青年はトゥルカナが、水場として利用する沢を地名によって列挙したのち、個々の沢が水源の山や丘につづいていることをわからせようとして、私のノートにその位置関係を書きおとした。

これがはじまりだった。われわれはB5版ノー

トのページを一枚一枚はぎとりながら、セロハンテープでつなぎあわせていった。あたらしくつぎ足された白い紙面には、すでにおおくの場所が書きこまれ、泥や手垢で汚れはじめた紙面上の沢筋からつづく、支流や丘、山や岩場がつぎつぎと書きこまれていった。集落の内外の青年たちもくわわり、居あわせた長老に位置関係や地名の確認をしたりしながら、毎日にぎやかに作業がつづけられた。そして、ノートのページがあと数枚になっ



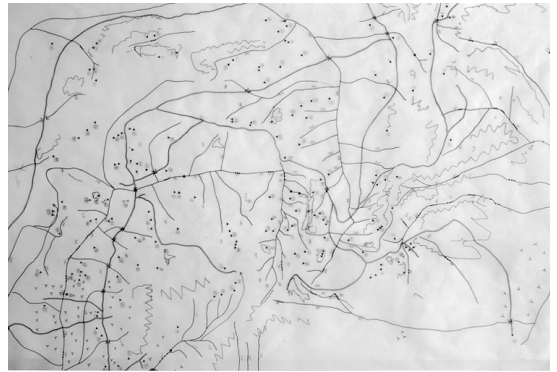
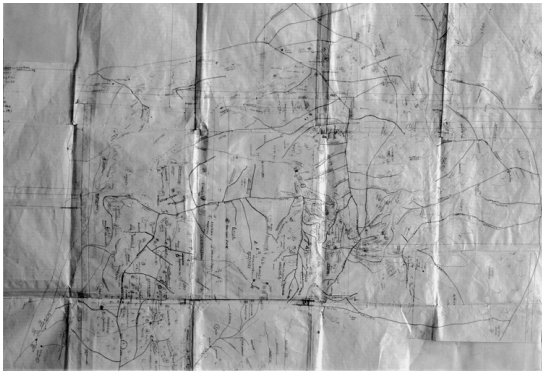


写真1：B5版ノートの22ページ分をつなぎ合わせて完成。右写真は左の「地図」を筆者が帰国後に書きうつしたもの。

た頃、ついにドドスランド全体の「地図」が完成した(写真1)。

きわめて詳細な「地図」の完成に、まずは驚き、恐れいったのであるが、「地名」という知識を土地とのかかわりや土地認識の問題として考えてゆこうとするにいたったのは、ひとつにはこの「地図」にみちびかれてのことだ。

この「地図」は70～80キロメートル四方ほどの地域をカバーし、記された地名は、河川に127、丘に151、その他をあわせれば400近くになる。こうしたひろい範囲における地理的表象の正確さや、土地を平面に描きおとすことのできる能力をはぐくむ要因として、ドドスランドの「見晴らしのよさ」を指摘することはまちがいでないだろう。ドドスランドの典型的な景観をなす土地では、ゆるやかな起伏をもつ丘陵地がちいさな溪谷を皺のようにきざみながらつづき、そのところどころに火山性の黒々とした岩山や隆起した突起状の岩峰が目をはく。小高い丘のうえに立てば、それををはるかかなたまで見わたすことができる(写真2)。

空間認識のありかたが景観特徴と密接に関係していることは想像に難くない。ザイール(現コンゴ民主共和国)のイトゥリの森に住むムプティを調査したコリン・ターンプルは『森の民』(筑摩書

房 1976年)のなかで、森から出たことのないムプティの男性をひらけたサヴァンナに連れだしたときの、この男性の反応を印象深く記している。はるか遠方でバッファローの群れがゆったりと草を食べていた。それをみてムプティの男性が訊ねた。「あれはどういう虫なのかね」。「バッファローだ」と教えたターンプルに、彼は「あんまり馬鹿な嘘はつかないでもらいたい」といったのだった。

さて、青年たちが描きあげてくれた「地図」が、その後おおいに役立ったことはいうまでもない。ドドスは日常のさまざまを語る際に、「どこで」という点につよくこだわる。放牧コースや失踪した家畜の捜索など、直接に場所を問題とするような話題にかぎらず、過去の大早魁や襲撃、ドドスの歴史や隣接集団との関係等々、どのような話題であれ人びとが地名にふれないことはない。できごとの「現場」をしめすために人びとは徹底的に地名をもちいるのであるが、地名への言及という実践の前提として、おのおのの地名でしめされる場所をだれもが知っていなければならない。

そうした「知識」をひとり欠く私は、人びとが熱心にしてくれる家畜の居場所や敵の動きの説明に出てくるおびたしい数の地名を追って、毎日



写真2：ドドスランドの典型的な風景。平原にロカペレペロット川が一本の筋をきざむ。



写真3：家畜キャンプから放牧に出かける牛群と牧夫・牧童たち。

のように「地図」をながめていた。そんな私に、くだんの青年はいった。

「ぼくは牧人だ。ドドスのすべての場所を歩いた。ウシを連れて行った。だから、ぜんぶ知っている」。

彼らはドドスランドをくまなく知り、その全体を地図として描きあげることができる。そのすべてに自分を行ったことがあり、そうしたかたちで、「知っている」。けれども、それはいったいどのような知りかたなのだろうか。

2 ナコリモルの儀礼

2000年1月14日。集落から15キロメートルほどはなれたケニア国境に近いナコリモルの丘で「トゥルカナ撃退」の儀礼がおこなわれることになった。隣接するトゥルカナとのあいだで、レイディング（家畜の略奪合戦）が頻発していた。私は明後日には首都のカンパラに出かける予定であったが、儀礼はチームの森につづく道路上でおこなわれ、夕刻にはおわるとのことなので、車で出かけることにした。同行してくれた集落の青年は、出がけに「われわれの地図をもってゆこう」といった。

ロカペレペロット川に沿った道を東へむかう。

途中の沢で水を汲むために車をとめた。粘土質の河床に掘られた深い井戸からは、3人が上下になって連携で水を汲みあげた。そのあいだ、青年は「地図」をひろげ、周囲にみえる岩峰や枝沢のひとつひとつを指さして、「地図」のなかにその地名を確認していった。その後の道中に、彼はなんどもなんども車をとめさせた。「地図」の詳細さと正確さに改めて感心し、深く納得する私に、彼は「カンパラからもどったら、東のほうや北のほう、ウシを連れてゆくすべての場所へ行こう。行って、そして知るのはいいことだ」といった。

儀礼はナコリモルの稜線上をとおり山道でおこなわれた。供儀として殺された黒いウシの頭部は、アロエや禾本科の草など三種類の植物を目と耳と口につめてから道のまんなかに穴を掘って埋められた。これにより、トゥルカナはここを横切ることができない。この地点に到達すると、人びとは急に恐ろしくなって引きかえしたり、仲間どおしで仲たがいはじめたりするのだという。

ウシの皮からは長いテープが一本つくられ、参加者たちにおのおの数十センチメートルずつわけあたえられた。このテープもまた、トゥルカナ撃退の呪力を発揮する。帰りの道すがら、牛群の踏みあとのつくった小径が東側から山道に連結して

いる場所を見つけるたびに、私は青年といっしょに穴を掘り、短く切ったテープを輪にして埋めた。

翌朝、ウシ囲いのまえでぼんやりと搾乳風景をながめていた私に、集落の青年は東のエスカーPMENTのほうへと注意をうながした。台地状の山塊が青くけむっていた。「ロカペレペロットはティムの森からくる」と彼はいった。山塊にさえぎられてみえないが、そのむこうにはティムの森がつづいているはずだ。集落の建つ丘からは、眼下にひろがる平原のなかをロカペレペロット川が東西に長くのびる一本の深い溝をきざんでいるのがみえた。それは東方にむかって、いくつもの丘をこえ、昨日訪れた水場の沢をへて、ティムの森へ——「あの稜線のむこう側にはトゥルカナのウシが（放牧に）きている」と教えられたなだらかな峰々へとつらなってゆく。そして、黒いウシ皮のテープを埋めた地点がひとつひとつ甦り、全体が、集落のウシ囲いのまえに立つ私の足もとからつづくひとつの空間をなした。

ドドスランドは、たしかに鳥瞰的に見わたすことのできる土地である。だが、人間は鳥ではない。ドドスランドでいちばん高い場所に立ったとしても、その全体がすべて見おろせるわけではない。彼らはそこを「ウシを連れて歩いた」のだ。牧夫として、まさにくりかえし、これらの場所を行き来したのにちがいない。

3 「身をおく」という知りかた

ドドスランドの「地図」がノートのページをつぎ足しつぎ足ししながら描きすすめられたことを思い起こしたい。つぎ足されたあたらしい紙面には、ふるい紙面にすでに描かれた場所からつづく場所が順次描きくわえられていったのであった。それは、紙面上にドドスランドという一定の範囲

を画定し、そのうえで座標軸上に個々の地点を有標物として個別にプロットしてゆくといったものではない。ドドスランドはまず「全体ありき」ではなかった。特定の「ここ」という地点からの連鎖として、つぎの「ここ」が記され、その軌跡こそがドドスランドの全体をつくりあげたのである。

おそらくこれとおなじ過程をたどって、人びとはドドスランドの全体を連鎖的な連続体として認知するのではないか。「そこへ行ったことがある」という知りかたで、彼らはドドスランドの全体を知っている。それは、いま目のまえにひろがる風景のかなたに、かつて身をおいた個々の場所が結びつけられてゆくことの帰結にはかならない。

ドドスは鳥瞰図的な全体地図としてドドスランドを把握するとともに、そのいっぽうでは身体性をともなったかたちで空間の広がりを認知しているものと考えられる。ランドスケープのさしだす鳥瞰図的空間と身体性にもとづく認知地図空間とは、ともにドドスの空間認識の基盤となっているはずだ。後者の認知のありかたは、ルロウ＝グーランが『身ぶりと言葉』（新潮社 1973年）のなかで指摘する、「こう行って、ああ行って、こう行ったら、ここにつく」といった「巡回空間」として完結するものでもある。実際の生活のなかで空間をとおりぬけてゆく際に経験される「へだたり」は幾何学的な尺度を必要とはしないのであり、外界を「ここ」とか「あそこ」として認識すること自体はドドスランド全体の地図や地名という知識とは、とりあえず独立している。同時に、ドドスのこだわる「ここ」という現場性は、本来、そこに身をおく当事者に占有されるものである。

けれども、「地名」という知識はこれを他者にひらかれたものとする。地名によって特定されたとたんに、「現場」は、ドドスランドのどこそこに位置する特定の場所、つまりあの地図に描かれた

ようなドドスランド全体における座標軸上の一点として把握されるとともに、おのおのの身体にきざまれた巡回空間的な認知地図内の一点である「あそこ」に結びつけられる。それは、紛れもなく「(かつて私が) 身をおいた場所」であり、当事者として行為した「現場」としてたちあらわれるのである。

4 ともにあるための知識

土地はそこに生きる人びとにとっては、一般化やさまざまな概念操作が可能な抽象物としての空間(space)としてではなく、直接に生きられ経験される具体物としての「ここ」という場所(place)として現前する。一般に、地名は、それによって示される場所とそこにある自然資源を利用するための実利的な知識であり、同時に、歴史や感情の記憶装置として機能したり、さらに「われわれの土地」として、よりおおきな集団のアイデンティティへの志向の要ともなりうる。けれどもドドスにおいて地名がさしだすものは、私が、そしてあなたが、かつて身をおいた「その場所」で

もある。

牧畜という生業の成立基盤は、植生が貧弱で牧草や水が乏しい厳しい自然環境を効率的に利用するため、人や家畜を分散させるとともに広い範囲を頻繁に移動するという生活様式にある(写真3)。ドドスもまた、一年の大半を集落と家畜キャンプとに別れて暮らす。そして、日常の語りには、人びとや家畜の居どころやその「動き」にかんする情報がもりこまれる。地名は人びとを、自分がいまいるのではない場所へといざなう。

「地名」という知識、そしてこれに頻繁に言及するという実践は、離れた場所に暮らし、移動をくりかえす家族と家畜が「いま、ともにある」ために、いいかえれば、共存の実感を保証するという点においてこそ、ドドスの人びとにとって実質的な意味をもちうるのではないか。人びとがドドスの地をくまなく知っていることのなかに、「人は社会のなかに生きる」という至極当然な命題のドドス的なありかたをもとめるのであれば、土地をめぐる知識の内容のみならず、むしろ、それが共有されるしかたにこそ着目してゆきたいと思うのである。

(かわい・かおり/静岡大学)